

シンテッポウユリ 9 月出荷栽培マニュアル

福岡県生産体制・技術確立支援事業（令和 2 年 3 月作成）

本県におけるシンテッポウユリの 8～9 月出荷については、晩生系の「西尾晩生」「雷山 3 号」を 5 月中下旬定植し、8 月下旬から収穫している。定植直後の高温遭遇によるロゼット回避のため冷蔵処理を行っているが、抽だい率が低く、安定的な生産が望めない。

このことから、晩生系品種より低温要求量が少なくロゼットになりにくい新品種「西尾 EX」による 9 月出荷マニュアルを作成した。

1 品種特性と作型

（1）「西尾 EX」の品種特性

「西尾 EX」は低温要求量が少なく、高温期に定植する作型でもロゼット化しにくい。

「西尾 EX」は、6 月上旬定植までは成り行き育苗で抽だい率が 90%と高く、高所ロゼットも発生しない。6 月中旬以降に定植すると抽だい率が低下し始め、6 月下旬定植では抽だい率が 80%まで下がり、出荷期も 9 月下旬から 12 月まで断続的に続き、出荷率は 50%程度となる。このため、育苗期の高温遭遇にもよるが、6 月中旬以降の定植については苗冷蔵処理が必要となる。

6 月上旬定植で 8 月下旬から、6 月中旬定植で 9 月上旬から、6 月下旬定植で 9 月下旬からの出荷となるが、冷蔵処理により生育は前進し、出荷期間は短くなる。

なお、4 月中旬定植では 7 月下旬～8 月上旬出荷となり、8 月盆出荷主力品種の「西尾 3 号」より出荷ピークが 5 日～1 週間早い。また、育苗期間も「西尾 3 号」より短い。

（2）作 型

3 月上旬に播種後、定植前 1 週間冷蔵処理した苗を 6 月上旬～中旬に定植し、8 月下旬～9 月中旬に出荷する作型である。

花芽分化発達が高温時を経過するため、定植後 8 月中旬まで寒冷紗被覆が必要である。

	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
6 月上旬 定植	◎-◎ ○ ————— △ ————— << >>							
6 月中～下旬 定植	◎-◎ ◎・◎・◎ ○ ————— △-△ ————— << >>							

○播種 ◎低温処理 △定植 ～～寒冷紗被覆 << >>収穫期

図 1 「西尾 EX」の 9 月出荷作型

（3）施設装備

育苗ハウスが必要であるが、通風がよく、高設ベンチが装備されている方が望ましい。

栽培ほ場は、かん水施設や寒冷紗被覆が必要なことから、雨よけハウスが望ましい。また、収穫後の開花抑制のための冷蔵庫が必須である。

2 栽培管理

(1) 育苗

10 a 当たり予備苗を含め、約 35,000 本が必要である。

200～288 穴程度のセル成型トレイに育苗用土を詰めかん水し、1 粒ずつ播種する。バーミキュライト等で種子が隠れる程度に覆土し、再度かん水する。

吸水種子の低温処理を行うことで、発芽率、発芽揃いが向上する。低温処理は暗黒条件下で吸水種子を 5～8℃、2 週間処理を基本とする。

ア 播種後に低温処理をする場合

セル成型トレイに播種、かん水した後、納屋等の冷暗所に 1 日程度置いて種子を十分吸水させてから冷蔵庫に入庫する。冷蔵中に用土や種子が乾燥しないように、トレイ段積みしてポリフィルム等で囲み静置する。

イ 播種前に低温処理をする場合

種子を十分に吸水させた新聞紙で包み、容器に入れて冷蔵庫に入庫する。低温処理後、吸水して膨らんだ種子同士がくっ付かない程度に乾かし、セル成型トレイに播種する。

発芽後は極端な高温、乾燥や過湿に注意する。温度管理は 25℃以上にならないように寒冷紗被覆等を行う。なお、「西尾 E X」は「西尾 3 号」に比べ葉柄や葉長が長いので、徒長しないように遮光を調節する。また、「西尾 E X」は苗立枯れ症状が発生しやすいので、育苗ハウス内の換気や温度管理に注意し、定期的な防除を行う。本葉が見え始めたら生育を見ながら追肥を行う。本葉 2.5～3.0 枚まで 10 週間、育苗ハウスで管理する。

(2) 苗冷蔵

定植適期の苗を 5℃の暗黒条件下の冷蔵庫に 1 週間入れる。その後、外気で 1 日程度順化させ定植する。

冷蔵中の苗の消耗を考慮し、入庫前日までに液肥を施用する。入庫時は、加湿状態でないことを確認するとともに、入庫中の乾燥に留意する。

(3) 基肥、畝立て

基肥は、窒素、リン酸、カリ各成分ともに 10 a 当たり 25～30kg 程度施用する。定植直後から肥効があらわれるほうが望ましい。定植床は床幅 90cm、通路 60cm、高さ 30cm 以上の高畝とする。定植床が水を十分含んだ状態で白黒マルチを張る。乾燥した状態でマルチを張るとかん水の水が畝内に行き渡らない。支柱の親支柱は φ31mm 以上、子支柱は φ25mm の鉄パイプを用い 2 m 間隔で設置する。フラワーネットは 15cm 角 6 マスを 2 段設置する。

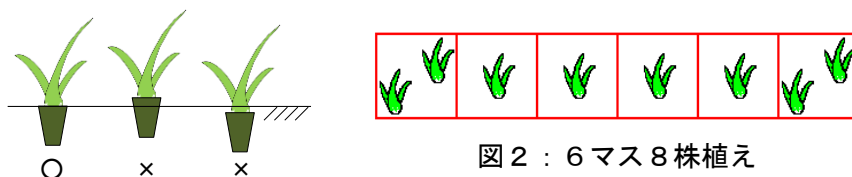
(4) 定植

定植 1 週間前から寒冷紗を張り、定植時の地温の低下に努める。本葉が 3 枚展開した時が定植適期である。定植後に十分にかん水するため、かん水後に地温が上がらない時間帯

に定植を行う。

定植間隔は条間 15cm、株間 15cm の 6 条植えに、両端のみ 1 マス 2 株植えとする。10 a 当たりの定植本数は約 33,000 本となる（図参照）。

植え付けはセル成型トレイの用土が隠れてしまわない程度とする。



（５）水管理

かん水チューブは種類によってマルチ下またはマルチ上に 1～2 本設置する。かん水チューブをマルチ上に設置した場合は、かん水した水がマルチ内に入るように定植穴を十分に開けておく。

生育期間中は花蕾数及び草丈を確保するために十分にかん水を行う。特に、定植から抽だいまでのかん水量が少ないと花蕾数が 1～2 輪になりやすいため、8 月出荷作型より多めのかん水を心がける。生育期間中は気温が高いので、かん水は夕方、気温が上昇しない時間帯になってから行う。

生育期間中に十分なかん水量が必要だが、停滞水は疫病の原因となるため、排水対策は十分講じる。

花芽分化は抽だい開始直後から始まるので、花蕾 3 輪以上を確保するためには、定植後、液肥を 2～3 回施用し、抽だい時の株張りを充実させる。

（６）病虫害防除

害虫はアブラムシ類、アザミウマ類、ネダニ、鱗翅目害虫（ヨトウムシ、ウワバ）などに、病害は葉枯病、疫病、軟腐病、炭疽病、苗立枯病に注意する。

葉枯病は一旦発生すると薬剤散布で止める事が困難な重要病害である。育苗期にも十分に防除を行い、定植後は週 1 回程度の予防散布に努める。特に梅雨時期は葉枯病や疫病が発生しやすくなるので、予防散布に加え事前の対策（高畝や排水）をとることが大切である。

また、連作を行うと立枯性病害が発生しやすいので、作付前に土壤消毒を行う。

3 収穫・調製・鮮度保持

一般的な切り前は、最も大きな蕾が 9～10cm 程度になった時である。収穫は朝あるいは夕方の涼しい時間帯に行う。

収穫後下葉を 15～20cm 除き、草丈、輪数などの規格にあわせて選別し、輪ゴムで結束し蕾を傷めないようにセロファンで包み、冷蔵庫内等温度の低いところで水揚げしておく。

少し萎れた状態で調製の方がセロファンで包む作業などはしやすくなる。

集荷まで時間がある場合も冷蔵庫に保管し、収穫後に開花が進むのを抑える。

